

THE LABRADOR FROM CINCINNATI

Everybody Laughed.
The Dog Didn't.



FERDINANDO FREGA

CINNATIから来たラブラドル

みんな笑った。犬は笑わなかった。

The P&G Saga · 18

昔から、いつも同じことを言う社会のルールがある。人は葬式で笑い、結婚式で泣く、と。たいていの人にとって、それはある考えの中に微笑みをひとつ残すだけだった。だが考えをめぐらせた者たち、自分たちこそ多数派だと信じていた者たちは、そんなことはないと言い張った。

それは5か月前、全世界に向かってこう告げるようなものだった。月にたった70ドルで、ウェブ全体をよじ登り、多国籍企業自身の検索クエリのいちばん上までたどり着いてみせる——金もなし、広告もなし、SEOもなしで——と。ほとんどの人はその知らせを冗談として、笑って受け流し、皮肉な面だけを受け取っただろう。それが証拠になりうるとは誰も思わなかったし、皮肉はそれをやってのけた者の行動の中にしかないとも思わなかった。

だが今日は特別な日だった。父の誕生日だ。朝早く、前もって知らせずに、私は父の永遠の住まいを訪ねた。墓地である。

その再会は涙と微笑みが入りまじったものだったが、最後には私なりのやり方で、この物語の中で父を祝い、驚かせた——私がいちばん得意なことであり、父がこよなく愛したことだ。

家に帰ると、妻が泣いていた。この日の感動に妻も加わってくれたのだと思った。違った。妻は私たちの犬のことで胸を痛めていた。10歳のアメリカン・ラブラドルで、もうすっ

かり老犬だ。3日間何も食べようとせず、妻には打つ手が見つからなかった。

犬の医者への往診でさえ——私は彼を獣医に昇格させたことは一度もない——人間の医療でおなじみの悪夢に変わった。有料の往診、処方箋、検査。そして彼はぴかぴかの新車に乗り、私はその場に立って、彼の頭のよさに感心していた。

そこで私は問題を調べ、原因を突き止めた。妻は、犬が子どものころから食べて育ったドッグフードの銘柄を変えていたのだ。ビタミンたっぷり、どこでも宣伝されている10キロ入りの特大袋。私がよく知っている会社の製品で、値段はわずか25ドルだった。

妻のElisabettaは、もっと安い新しい銘柄を試していた。袋には雌のアメリカン・ラブラドルが描かれていて、それで気に入ってもらえると思ったのだ。だめだった。彼はあの銘柄が欲しかった。あの銘柄だけが。

妻は私にからかわれていると思った。だが私が新しいドッグフードをひとつかみ取って古い袋に入れると、彼は食べ始めた——そして最初のひと口ですぐにやめ、私を見た。おれをだますことなんて絶対にできないぞ、と言わんばかりに。

私はこのありさまに狂ったように笑い、妻は犬が死にかけていると思って泣き、あいだに挟まれた娘は、二人ともばかだと言っていた。

私は犬のリードを取り、散歩に出た。ペットフード店のショーウィンドウまで歩いた。そこに、まさに陳列されていたのが彼の銘柄だった。彼は隠そうともしなかった。しっぽを振り、吠えて、これが欲しいんだと私に伝えた。

私は立ち止まって説明した。いまは苦しい時期なんだ、おまえがあんなに好きなあの銘柄は、かつて私がよじ登った対象のひとつで、いつかおまえをあの部門の責任者に任命させるかもしれない——だが当面は、この状況を受け入れてもらうしかない、と。

彼は犬だった。そう、それは誰もが認めるところだ。だが彼にはひとつ強みがあった。アメリカの犬だったのだ。それが世界中のほかのどの犬よりも彼を有利にしていた。

家に戻ると彼は食べ始め、好奇心で死にそうな妻は、何があったのか知りたがった。

私は妻に言った。Cincinnatiの多国籍企業でPET&FOOD部門を任せてやると約束したら、彼は信じたのだ、と——Fregaという名の男が何かを言ったら、耳をそばだてて、それが本当になるかもしれないいつも思っておいたほうがいいからだ。

Ferdinando